

明治後期における女子教育の一断面

—— 私立裁縫女学校の地域内展開と歴史的位置 ——

池 田 雅 則

はじめに

裁縫は江戸時代より、多くの女性に必須なたしなみとして捉えられ、裁縫塾や家でその技能を伝授されていた。学制に始まる近代学校制度の下にあっても、女子教育における裁縫の重要な位置は変化することではなく、上記のような場における裁縫教育は脈々と営まれ続けた。「今不就学女子ノ父兄ヲ勧誘シテ就学セシムルコトヲ急フサルヘキト同時ニ、女子ノ為ニ其教科ヲ益々実用ニ近切ナラシメサルヘカラス。裁縫ハ女子ノ生活ニ於テ最モ必要ナルモノナリ。故ニ地方ノ情況ニ依リ成ルヘク小学校ノ教科目ニ裁縫ヲ加フルヲ要ス。」と、女子の低就学率打開の理念として裁縫教育の必要性を訴えた1893（明治26）年文部省訓令第8号は女子教育と裁縫教育の関係の深さを如実に示している。明治30年代に入り、1900（明治33）年小学校令改正による就学督促の強化や、女子には普通教育が不必要とする教育観の変化、日清戦争後の産業化など、複合的な要因により全国的女子就学率は急激な上昇に転じ、明治36年に90%に達した¹⁾。このような女子初等教育の浸透の中で、一部において上級学校の需要が生まれる²⁾。そして明治後期には、「高等女学校令」により設立された高等女学校に限らず、教育要求に応じて多様な初等後女子教育機関が全国的に設立された。本稿ではこの内、数量的にも大きな割合を占めていた私立の裁縫女学校に着目したい。

従来裁縫女学校は、普通学を志向する制度上・教育内容の充実度を基準とした視点から「高等女学校—実科高等女学校—裁縫女学校」という女学校の3層構造の底辺に位置づけられていた³⁾。これは裁縫教育に特化し性役割分担を促進する片棒を担ぐ側面の強い裁縫女学校を評価する有力な視点となっている。そしてこの構造と視点を基本的に敷衍した上で、制度や言説や書籍における教育構想、師範学校や高等女学校といった模範的な学校における裁縫教育に

重点を置きつつ分析が進められている⁴⁾。ただし上述の構造と視点を敷衍するとしても、同年代の女子が利用する裁縫教育機関は上記の3つに限られるわけではない。別の裁縫教育の場も視野に入れた上で裁縫女学校の位置を改めて評価しなければならない。またそもそも上述の評価軸自体が絶対的なものではなく、評価軸を変えれば裁縫女学校に対して別な評価を下せる余地は残っている。

本稿では、当時裁縫女学校と同様に同年代の女子の裁縫教育に大きな役割を果たしていた補習教育や学校外教育も視野に含めて、裁縫女学校の位置を改めて検討したい。また同時に上述の評価軸を一度相対化し、教育内容、教育需要、教育目的、教員、教育効果、階層性といった観点を取り入れ、裁縫女学校以外の裁縫教育の場と多面的な比較を試みつつ裁縫女学校の位置を改めて評価したい。ただし、裁縫女学校は高等女学校や師範学校と比較すれば制度上の限定が小さい各種学校である。ゆえに、その存在は非常に多様でありその位置を簡単には固定できない。本稿では差し当たり地域を限って評価を試みたい。明治後期には大都市部以外に裁縫女学校が大きく発達していくが、本稿では裁縫女学校が発達した地域の1つである群馬県に対象を絞って考察を試みたい。

第1節 裁縫女学校の展開過程

1. 全国的動態

冒頭で述べたように、従来から裁縫教育自体は学校外の裁縫塾、寺子屋や家にて広くなされていた。例えば滋賀県では1899（明治32）年でも県内に114箇所の裁縫所が存在しており⁵⁾、1930年代に至ってもなお各地に存在していたようだ⁶⁾。また京都大阪岡山など一部府県の小学校には裁縫専修科（1900年小学校令以降では小学校に類する公立各種学校）が併置され、普通教育の補習とともに簡易な裁縫教育が

なされていたことが明らかになっている⁷⁾。

一方で、本稿が取り上げる裁縫女学校は、大都市には明治10年代より草分け的な私立裁縫女学校——渡辺辰五郎の東京裁縫女学校、共立女子職業女学校や、仙台における朴沢巳代治の松操学校など——も存在したが、全国的にそれほど広がりを見せることはなかった。裁縫女学校は表1⁸⁾のように明治30年ごろでも、校名に「裁縫」を掲げた私立女子各種学校は全国で115校ほどであり、裁縫を教育内容の中心とした技芸や家政の私立女子各種学校を併せても150校ほど、その半数近くは東京・京都・大阪という大都市所在の府県に集中していた。しかし明治30年代には女子各種学校自体約2.3倍という急激な伸びを示した。同時に校名に「裁縫」や「技芸」「実用」等の校名を掲げた女子各種学校は明治40年ごろには全国で370校ほどに上り、大都市圏以外では約5倍という驚異的な伸びを示した。

2. 群馬県における動態

では群馬県における展開過程はどうだったのか。群馬県の私立裁縫女学校の始まりは、1894(明治27)

年に従来の裁縫塾を拡大して設立された太田裁縫学校であるが、明治30年代に入るまでは、表2のように私立裁縫学校数はわずか2校に過ぎなかった。ところが、明治30年代になると急激に拡大する。この急激な拡大の最大要因は、初等教育修了者の拡大による。1897(明治30)年の『群馬県学事年報』で前橋市は以下のように報告している。

六校アルモ其内稍完全ノ設備ナルモノハ二三ニ過キス他ハ概シテ微々タルモノニシテ見ルニ足ラサルナリ、而シテ又生徒学業ノ如キ多クハ一二科目ニ偏進ス、然レドモ小学校卒業生ノ増加スルニ従ヒ増加ノ傾向アリ(前橋市「各種学校」)

この記述からは、各種学校の設備への不満が示されつつも、小学校を卒業した者(尋常科か高等科は不明)が増加するとかれらの受け入れ先として各種学校も増加すると認識されていたことがわかる。そして表2に見るように、私立裁縫女学校は前橋と高崎という都市部から徐々に渋川、桐生、藤岡などの郡部へと発達をとげていった。

また県内では他の裁縫教育の場も発達していた。まず高等女学校の設立が徐々になされる。高等女学

表1：全国の私立女子各種学校

学校名称による分類		1897(明治30)頃			1907(明治40)頃		
		東京・京都・大阪	その他	合計	東京・京都・大阪	その他	合計
裁縫家政系統	裁縫	61	53	114	34	271	305
	技芸・工芸・手芸・女芸・工女・女工・手工	1	2	3	16	26	42
	実科・実業・実修・実習・実芸・実用・職業	2	9	11	3	18	21
	造花					1	1
	家政				2	1	3
裁縫家政系統合計		64	64	128	55	317	372
その他	英語・仏英・清韓語・語学	1		1	3	1	4
	教員養成・師範予備・保母				4	2	6
	音楽・体操・美術				6		6
	夜学・補習		1	1		5	5
	看護・産婆	15	10	25	20	29	49
	医学・薬学				3	1	4
	商業				1	2	3
	臨済宗 神学校		1	1		1	1
		1		1	1	1	2
名称では判別不能	裁縫家政系の学科	3	24	27	3	22	25
	その他の学科	26	40	66	12	60	72
高等女学校に類する各種学校(校名判明分)		10	9	19	31	55	86
私立女子各種学校総計		120	149	269	139	496	635

表 2：明治期群馬県における私立裁縫女学校一覧

(『群馬県学事年報』『群馬県統計書』) 上段＝教員数、下段＝生徒数

校名	所在地	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910
太田裁縫学校	高崎市	3	1	0	1		1	1										
		63	35	0	6		0	0										
大友裁縫学校	前橋市	1	1	1			1	2	2									
		10	33	30			38	30	50									
前橋裁縫女学校	前橋市					1	1	2	1	1	1	1	2	2	2			
						50	31	40	40	50	58	50	58	101	78			
明治裁縫学校	前橋市							3	3	5	7	7	7	7	5	5	4	5
								83	95	150	187	197	203	211	207	110	159	183
前橋裁縫専門学校	前橋市									1	1	1	1	1	1	1	2	1
										0	18	18	20	15	45	20	20	65
月田裁縫学校	勢多郡粕川村										1	1	3	3	3	3	3	3
											98	157	161	121	108	96	57	53
上毛裁縫学校	群馬郡国府村										3	5	5	5	8	4	4	4
											70	80	66	60	45	52	50	60
鈴木裁縫学校	前橋市										1	1	1	1	1	1	1	1
											19	30	35	40	72	30	30	40
和洋裁縫女学校	前橋市										1	2	2	1	1	1	1	1
											30	37	40	35	35	34	30	
高崎裁縫女学校	高崎市										3	2	3	2	2	2	2	2
											60	71	96	83	94	105	91	
佐藤裁縫学校	高崎市													1	2	2	4	3
														51	102	152	210	278
桐生裁縫女学校	山田郡桐生町													3	4	3	4	4
														48	56	43	36	46
実用裁縫学校	前橋市													1	1	1	1	1
														8	20	25	30	45
女子裁縫専修所	前橋市													1	2	2		
														41	72	75		
女子裁縫学校	前橋市														1	1	1	1
															10	24	28	31
明倫裁縫女学校	群馬郡渋川町														2	2	3	2
															89	85	70	35
西谷田裁縫女学校	邑楽郡西谷田村														1			
															10			
吉田裁縫学校	高崎市																2	2
																	30	50
実地専門前橋裁縫学校	前橋市																	1
																		20
藤岡裁縫女学校	多野郡藤岡町																	3
																		67
裁縫学校総計	学校数	2	2	2	1	1	3	4	3	3	6	8	8	12	15	13	13	15
	教員数	4	2	1	1	1	3	8	6	7	14	20	23	30	36	28	32	34
	生徒数	73	68	30	6	50	69	153	185	200	450	622	651	832	1088	841	859	1094
高等女学校総計	学校数						1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3
	生徒数						79	168	242	272	290	302	318	338	345	413	455	584

※高崎裁縫女学校は1906（明治39）年に一度廃校したが、同じ設立者（清水新次郎）のままで、すぐに再設立した（高崎裁縫学校）。前橋裁縫専門学校は1909（明治42）年に前橋裁縫女学校へ、明倫裁縫女学校は1910（明治43）年に渋川実習裁縫女学校に改称した。

※上記以外に「高等女学校ニ類スル各種学校」であった、共愛女学校に裁縫科が附設されている。また、1894（明治27）年には高崎に高崎婦女学院が設立されているが、すぐに閉鎖しており学事年報には情報が掲載されていない。

※大友裁縫学校は、男子が在籍していた年もあった（1899年18人、1901年20人）。

校は、1885(明治18)年に県立高等女学校の廃校以来、「高等女学校ニ類スル各種学校」である共愛女学校以外に一枚もない状況が続いていたが、1898(明治31)年の議会承認を受け、翌年に高崎に県立高等女学校が設立された。その後、明治30年代には高等女学校の設立は停滞したが、明治40年代に入り1908(明治41)年に山田郡に郡立高等女学校、1910(明治43)年に前橋に市立高等女学校が設立された。また「高等女学校令」改正により北甘楽郡立実科高等女学校も設立された。ただし群馬県内には、専ら技芸教育だけを施す、技芸専修科は設置されなかった。

つづいて全国的には男子中心に発展したといわれる実業補習学校の設立が⁹⁾、群馬県では行政や教育会による奨励活動により女子にも重点がおかれながら展開された¹⁰⁾。実業補習学校は、1902(明治35)年「実業補習学校規程」改正により加速度的に設立され、1904(明治37)年度『群馬県学事年報』で各郡は、

○学校教育ノ不足ヲ補ヒ且直接実業上ニ資益センカ為メ実業補習学校(殊ニ女子ノ実業補習学校)設置ノ奨励ニ努メタルモ、時局ノ当初ニ於テ〔日露戦争のこと、筆者註〕痛ク町村費ニ節減ヲ加ヘシ影響ト該科ニ適当ナル教員ノ不足トニヨリ未タ之カ実施ヲ見ルニ至ラサリシハ誠ニ遺憾ナリキ(群馬郡)

○前年度ノ指導ニ因リ其効果ノ観ルヘキモノハ…女子教育ノ普及ナリトス、其實績ヲ挙クレハ女子就学ノ増加ハ各区乙種学事会及各小学校ニ於テ実地授業ノ研究会女子実業補習学校ノ設置等続々勃興セルトニ徴シ知ルヘキナリ(碓氷郡)
と、郡レベルで実業補習学校における女子教育が奨励されていた。そして実業補習学校女子課程は、1907(明治40)年段階の実業補習学校92校中、郡部のみに71校に設置された¹¹⁾。また、各郡の教育会が短期の裁縫講習会を開く場合があり、東京の裁縫女学校教員や地元の小学校の女性教員に教授を依頼していたという事実も確認できる¹²⁾。

そして、従来どおり未公認である私設の裁縫塾や仕立屋における裁縫教育も存続していた。利根郡桃野村に1883(明治16)年に生まれた小野まは、祖父から読書算術を学んだ後、水上で須藤たけという師匠に1年間就き裁縫を学んだ。そして1902(明治35)年からは自ら農家の女子に裁縫を授け、1908(明治41)年には桃野村の実業補習学校にて裁縫を教授している。また碓氷郡細野村に1888(明治21)年に生

まれた上原きく寿は、1902(明治35)年に高等小学校を卒業し、翌年に明治裁縫学校の本科に入学するまでの間、原市実業補習学校で修業の傍ら、授業時間外に原市町の真下和久利に就き和服裁縫を教授されていた¹³⁾。また小泉、太田、桐生、館林といった小都市に仕立屋兼裁縫師匠の事例が見つかる¹⁴⁾。

第2節 地域における私立裁縫女学校の特徴

以上のように女子教育の拡大過程の中であって、さまざまな裁縫教育の場が同地域に同時に存在していた。この内裁縫女学校は、他の裁縫教育の場と比較してどのような特徴をもっていたのだろうか。裁縫女学校が隆盛した理由を解明する上でこの点の検討は欠かせない。以下、数点の論点から私立裁縫女学校の実態と特徴を考察しよう。

○規模・設備

表2より学校の規模を見ると、生徒数は小規模な学校もありつつ、高等女学校には及ばないものの100人もしくは200人をも超える多数の生徒を集める学校もあった。例えば1900(明治33)年に設立された明治裁縫学校は当初より規模の大きな学校であったが、1903(明治36)年には187名という大量の生徒を収容し、分校を富岡町に設立することになった。その分校設置願からは「今般各郡ヨリ申込ノ生徒ノ日々増加シ本校教室狭溢ノ為メ入学ヲ謝絶致候場合モ有之」というほどの盛況を示したことがわかる¹⁵⁾。生徒数ベースで見れば、実業補習学校女子課程は1907(明治40)年段階で校数65校に2756人が在籍しており、1校当たり42.4人が在籍していた(『群馬県統計書』)。裁縫女学校は生徒規模において実業補習学校と高等女学校の中間の位置といえよう。教員数から見ると多くの学校が複数人で運営おり、女子教員が1校平均1.4人に過ぎない実業補習学校女子課程に比べると裁縫女学校の方が充実した人員を揃えていたと考えられる。

さて、明治裁縫学校本校の1903(明治36)年度卒業生の内、裁縫教員になった者の出身地を示した表3からは、学校が所在していた前橋市と周辺の群馬郡といった近隣の地域以外からも少なくない生徒が入学していたことがわかる。このように広い範囲から生徒を集めるには寄宿舎が不可欠であるが、学校

表 3

出身地	人数
群馬郡	5
多野郡	2
北甘楽郡	2
新田郡	2
前橋市	1
勢多郡	1
吾妻郡	1
碓井郡	1
佐波郡	1
栃木県	1
埼玉県	1
茨城県	1

設置願からは明治裁縫学校を含む7校1分校でその存在が確認できる。つまり裁縫女学校は狭い地域内に閉じた学校だった訳ではなく、広範囲から生徒を集めえる素地があったといえよう。

対して実業補習学校は所在する町村と密着していたようだ。たとえば中之条実業補習学校は、生徒の入学資格を「中之條町ニ住居スル者」と限定し、「但シ 都合ニヨリ他町村ヨリ通学スルモ入学ヲ許可スルコトアルベシ」と、但書で他町村からの入学許可を与え、町内に住居する者に関しては授業料を「月額女子部ハ金叁拾銭、男子部ハ金貳拾銭」としたのに対し、「但 他町村ヨリ通学ノ生徒ハ月額金五拾銭トス」と高額に設定していた¹⁶⁾。

○教育目的

では裁縫女学校は、どのような触れ込みで生徒を集めていたのか。各校の教育目的は当然ながら裁縫の教授が第一であり、とりわけ明治20年代設立の学校ではその技術の伝授だけを教育目的としている¹⁷⁾。しかし明治30年代になると、裁縫の伝授以外の目的も併せ持つ学校が現れる¹⁸⁾。第一に編物や袋物といった手芸・技芸の教授も目的とする学校が現れた。ただし後述するように、実業補習学校女子課程が、「実業補習学校規則ニ基キ女子ノ為ニ適切ナル智識技芸ヲ授クルト同時ニ普通教育ノ補習ヲナスヲ以テ目的トス」(原町女子実業補習学校)としたように、技芸に加えて普通教育の教授を目的とする裁縫女学校は県内には存在しなかった。

第二に「婦徳ヲ涵養」する教育目的である。女子裁縫学校は「婦人斎家ノ須要ナル和服及ビ洋服裁縫ヲ主トシ兼テ諸種ノ手芸トヲ教授シ努メテ其教授ノ内容ヲ実践セシムルニアリ」と掲げ、佐藤裁縫学校は「本校ハ女子ニ衣服ノ裁縫ニ関スル知識技能ヲ与ヘ併セテ婦徳ヲ涵養シ且斎家ニ必要ナル各種ノ事項ヲ授ケ」と掲げる。これらの裁縫女学校では、「斎家」という語を掲げているように家の中をまとめる女性の養成を目的としており、佐藤裁縫学校のように「斎家」に至るには裁縫の学習により「婦徳」を涵養することが必要だとされた。ただし、県内の裁縫女学校が掲げた女性観は、日清戦争後に現れる国家国益と結びついた女子教育論とはやや異なり¹⁹⁾、国家とのつながりが強調されるものではなかった。

第三に裁縫科教員養成という目的である。こうした目的を掲げた学校は6校確認でき。これらの学校の内、明治裁縫学校本校は学則で「明治裁縫学校」と掲げると共に自らを「裁縫教員養成所」と名乗り、裁縫教員養成の目的を前面に出していた。ただしこれらの学校は、明倫裁縫学校が「検定試験ヲ受ケ裁縫科教員タラントスルモノヲ養成スルニアリ」として設立目的に挙げるように、概ね専科教員検定試験の受験予定者を対象としたもので、卒業が教員免許を担保するものではなかった。こうした制度的根拠の薄い教員養成課程に裏づけがなされるのは、明治末期の1910(明治43)年の県学務部長通牒による、佐藤裁縫学校師範科卒業生への無試験検定による裁縫科専科正教員の免許付与が初めてである²⁰⁾。

○教育課程

では、以上の教育目的に対して裁縫女学校はどのような教育課程を用意したのだろうか。全般的に言って裁縫女学校では、多様な設立目的に沿った複線かつ段階的な課程を用意していた。学校設立願等から課程が判明する14校の課程を整理すると(図1)、以下の6種類に分類できる。①各学校の基礎となる「本科課程」。②本科課程を簡易にした「簡易課程」。③本科課程と並列し、かつ短い修業年限である「速成課程」。④本科課程および速成課程を卒業した者が入る「上級課程」。⑤教員養成を目的とする「教員養成課程」。⑥随意に科目履修できる「随意課程」。

このうち⑥「随意課程」だけは別課程との兼修や科目単位の履修が認められ、他の課程と大きく異なる性格を持っていた。教育内容は、実用裁縫学校随

意科では造花・編物・袋物・茶道のうち1科もしくは数科であり、明倫裁縫学校の別科は裁縫教授法・家事・国語・女礼式・編物・造花・挿花・点茶の内1科もしくは数科であった。中には明倫裁縫学校のように裁縫教授法や家事といった教員養成や生活に対応した教育内容もあったが、概ね趣味的な教育内容が主流であったといえる。この課程は「手芸」「技芸」を通した「婦徳」の養成という教育目的に対応する課程であったといえよう。

さて⑥「随意課程」を除いた5課程をみると、①「本科課程」と②「速成課程」から③「上級課程」に接続する系統が存在し、傍系として④「簡易課程」と⑤「教員養成課程」が存在していた。

①「本科課程」および②「速成課程」について、上毛裁縫学校は「上級課程」に属する同校研究科への入学資格を「重ニ実地練習ヲ主トスルモノナレハ本科又ハ速成科ヲ卒業シタル者ニ許ス」とし、女子裁縫学校は「上級課程」である高等科への入学資格を「本科及速成科ノ卒業生若クハ之ト同等以上ノ実力ヲ有スルモノトス」としたように、学校に「上級

課程」が存在すれば課程卒業を要件に「上級課程」へ接続可能な課程であった。ただし、両者は入学資格や修業年限で異なる。まず入学資格について「本科課程」では、どの学校も12歳以上や学齢外という年齢資格か、尋常小学校や高等小学校の卒業という学歴資格のみ入学ができた。対して「速成課程」は、鈴木裁縫学校の速成科が「本科ニ入ラントスル者ハ無試験ニテ入校ヲ許可シ、速成科ニ入ラントスル者ニハ試験ノ上入学ヲ許スモノトス」とし、上毛裁縫学校の速成科が「速成科ニ入ラントスル者ハ実地試験ノ上入学ヲ許スモノトス」としたように、入学時に試験を課していた。また、明倫裁縫学校と西谷田裁縫学校の速成科は、入学希望者に「普通裁縫ノ素養」があることを入学条件としていた。つまり「速成課程」の入学には、それ以前に「普通裁縫」と言われるような水準の裁縫技術習得が要求されており、入学者の水準は「本科課程」より高く中級者向けの課程であったといえよう。ゆえに「速成課程」の修業年限は「本科課程」よりも短くなっていた。また入学時期は「本科課程」が各校とも学年の始まり（4月や5月など）であったのに対し、「速成課程」は上毛裁縫学校が「入学ノ期ヲ定メス臨時ニ募集スルモノトス」とし、女子裁縫学校が「速成科及技芸科ハ入学期ヲ定メス臨時ニ募集ス」としたように、臨時募集をしたり随時入学を可能としたりするなど柔軟に設定していた。つまり「本科課程」は裁縫初心者を一斉に教育するものであり、「速成課程」は裁縫中級者にそれぞれのペースや要望に合わせた裁縫技術を伝授するものであったといえよう。

③「上級課程」は、「本科課程」または「速成課程」の卒業程度を入学要件とし、水準はかなり高かったとみられる。修業年限は女子裁縫学校や佐藤裁縫学校の「研究科」のように、年限が定められている学校もあったが、上毛裁縫学校の「研究科」が修業年限を1ヶ年以内とし、明治裁縫学校の「専科」や明倫裁縫学校の「研究科」が年限を定めておらず、修学期間については比較的緩やかな運用が想定されていたと推測できる。「上級課程」は修学年限を定めないうわりの、裁縫の上級者がそれぞれの希望に沿った形で、より高い水準の裁縫技術を獲得するための場所と機会を提供していたと考えられよう。

④「簡易課程」は、「本科課程」と同様に学齢外または尋常小学校卒業程度の学歴があれば入学可能であった。但し、教育水準は「本科課程」と比較する

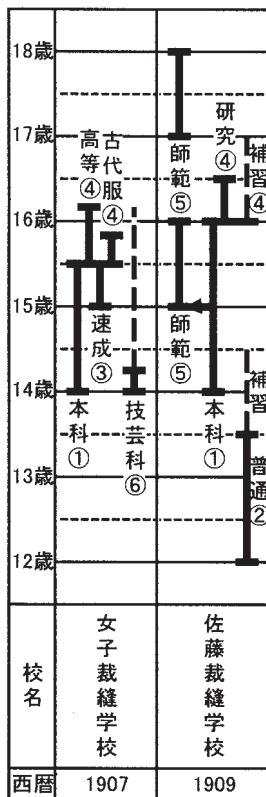


図1：教育課程の一例（点線は年限不明）

とやや低いものであったようだ。明治裁縫学校本校の速成科の課程は、「簡易ノ方法ニ依リ裁縫ニ必要ナル事項ヲ教授シル為メ」と「簡易」であることを強調している。また佐藤裁縫学校の普通科は、最低入学年齢が満12歳で同校本科より2歳若く、修業年限は1年6ヶ月であり本科より半年短くなっていて、さらに本科にはあった家事科が省略されていた。なお、各校の課程とも「本科課程」と異なり、卒業後に「上級課程」に接続できない仕組みになっていた。このように「簡易課程」は、裁縫を短期間で学習できたとはいえ、その水準は「本科課程」に劣るものであったといえよう。だが、日常生活で必須な技術以上を必要としない者に対しては、「簡易課程」の意味は大きかったのではなかろうか。

このように裁縫女学校は、生徒を集めるために多様な教育課程を用意したのであろう。なお⑤「教員養成課程」については後で詳しく触れたい。

○教育内容

群馬県の裁縫女学校は裁縫の教授にほぼ特化しており、国語・算術などの普通教科はほぼ存在しない。

裁縫女学校における普通教育は、前橋裁縫学校の講習科（算術）と佐藤裁縫学校の師範科（国語、算術）という教員養成課程と、明倫裁縫学校と佐藤裁縫学校の随意科の選択科目としての国語以外に存在しなかった。表4のように各校「本科課程」の科目を挙げれば、各校とも裁縫の教授が課程上の8割以上を占めていたことがわかる。残りは編物、家事・家政や修身・女礼が僅かに設定されただけであった。

この実態からは、まず既述の「婦徳ヲ涵養」する教育目的の中身が問われる。つまり群馬県の裁縫女学校が養成しようとしたのは、教員志望者を除けば、高等女学校とは異なり初等教育以上の普通科目を必要としないという女性であった。裁縫女学校は教員を養成するという限りにおいて女性の社会進出を助ける目的を持ちながらも、それは結局のところ家政向きの女性を養成する役割を担うという側面を強く持っていた。

また群馬県は全国有数の蚕業地帯として知られているが、だからといって裁縫女学校には蚕業に関わる機織や染色といった教育内容は見られず、これらは実業補習学校にて教授されていた²¹⁾。裁縫および

表4：各女子教育機関の「本科課程」入学時の科目

学 校 名	科目（数字は週当たり時間数）
太田裁縫学校	和服裁縫、縫取、造花
大友裁縫学校	裁縫
高崎婦女学院	家政学（読書算術を含む）30
鈴木裁縫学校	裁縫約40、礼法約2
上毛裁縫学校	裁縫47、修身2
明治裁縫学校	裁縫36、修身1、編物4、唱歌1、礼式西洋手巾縫取挿花抹茶等八望ミノモノニ除科之ヲ課ス
裁縫女学校	修身2、裁縫32、家政2
実用裁縫女学校	裁縫34（随意科として造花7、編物3、袋物2、茶道1がある）
女子裁縫学校	修身1、裁縫33（技芸科兼修可能、編物2、摘み細工2、造花3、果実2、挿花5）
明倫裁縫学校	修身1、裁縫32、編物2（別科として国語、女礼式、編物、造花、挿花、点茶（各3））
佐藤裁縫学校	修身1、裁縫32、家事2
原町女子実補	修身1、国語2、算術1、色織及ビ機織20、裁縫12
沼田女子実補	修身1、裁縫30、家事5
澤野実補	修身1、国語3、算術3、家事3、裁縫18、農業2
国衙実補	修身科1、国語科4、家事科2、実業科22
群馬県立高女	修身2 国語6 歴史地理3 数学2 理科2 図画1 裁縫4 音楽2 体操3 英語3、英語ヲ修メサル者ハ其ノ時間ヲ以テ裁縫ヲ自修セシム
北甘楽郡実科高女	修身2 国語6 歴史2 数学2 理科及家事2 裁縫14 図画1 唱歌2 体操3、裁縫ノ一部トシテ手芸ヲ加フ（簡易ナル編物、嚢物）

手芸・技芸だけしか教授しない裁縫女学校の教育は、農村で直接生産に携わる女性の養成をも満足しないのではないか。この裁縫女学校の非生産的な傾向は、実業補習学校とは対称的に都市中心に学校が設立されたこととは無関係ではないと考えられる。そしてその教育内容は、

見よ、私立の裁縫学校若くは中等程度の学校に於ける裁縫科の成績品を。華美なる被布美玉の如き肘突花の様な涎掛を始めとして、刺繍摘細工造花瓶細工等の成績品を陳列して得々たり。是等の製作品は或る社会の人には必要なるかも知れぬが、普通とし又一般としては実用に遠き物なり。否な華美の標本たるを免かれざるなり。所謂装飾的不生産的と称するも、実に過言に非らざるを信じるなり。(句読点筆者)²²⁾

と批判されることもあった。

裁縫女学校(明治裁縫学校)と実業補習学校(沼田女子実業補習学校)の裁縫科教育内容を比較してみると、両者とも「単衣」「衿」「綿入」「羽織」といった基礎的な衣服、「一つ身」「三つ身」「四つ身」という幼児や子ども向けの寸法や「本裁」という大人向けの寸法といった、基礎的な寸法を第1学年で学習し、その後「被布」「シャツ」「ツボン下」「袴」「帯」「合羽」「比翼」「夜具(夜着)」「腹掛」「脚絆(半)」「足袋」「股引」といった衣服や「布団」を制作しており、共通している部分も多い。しかし裁縫女学校では第一に、「ミシン使用法」が別に教授されていた。第二に、実業補習学校では機織で製品化することを教授されていた絹布を使用した裁縫がなされていた²³⁾。第三に、「袋物」「房」「頭巾」「帽子」「旗」「暖簾」「涎掛」「巾着」といった衣服以外の布製品を数

多く教育内容に含まれていた。第四に、課目外の課程を設けられて、洋服というまだ普及をとげていない衣服の作成や、「摘み細工」「刺繍」「押し絵」といった嗜好品の制作がなされていた。つまり裁縫女学校の教育内容は、高度であるだけでなく、上記引用のごとく「或る社会」のみに必要な嗜好品の制作に偏っていたといえよう。

この教育程度の両者の差は生徒の学習過程にも反映されていた。裁縫女学校で学んだ者の経歴を見ると、1902(明治35)年に高等小学校を卒業し、翌年に明治裁縫学校の本科に入学するまでの間、原市実業補習学校に入学する傍ら授業時間外に原市町の真下和久利に就き和服裁縫を修業していた1888(明治21)年生まれの上原きく寿や、1901(明治34)年に尋常小学校を卒業、1907(明治40)年には堤ヶ岡実業補習学校を卒業し、その後佐藤裁縫学校にて2年間修学の後同校の助手となった1891(明治24)年生まれの茂木まつなどのような例が散見され、裁縫女学校は実業補習学校の内容では不十分とする子女を収容していたことが推察される。

○教員と教員養成

裁縫女学校の教育に携わった教員はどのような者だったのか。教員の履歴書を整理した表5からは2つの特徴が見えてくる。第一に裁縫教員の多くは出生地の近所で裁縫を学習した後、出生地とは離れた場所で裁縫修業を経験している。第二に、その内のほとんどは、集団教授に代表される近代的な裁縫を教授する東京の裁縫女学校での学習を経験している。つまり多くの裁縫女学校は、新しい教授法を身につけた教員に担われていた。従来からの仕立屋な

表5：裁縫女学校設立当時の教員(出典は注15参照)

氏名	西暦	身分	性別	地元での裁縫学習		地元外での裁縫学習	
				出身地	裁縫学習の場	場所	裁縫学習の場
太田ウメ	1893	太田裁縫学校設立者兼教員	女	茨城県	女性	東京	女子職業学校
大友清次郎	1894	大友裁縫学校設立者兼教員	男	前橋	裁縫師	東京	三越和洋裁縫教習所
鈴木いゑ	1894	高崎婦女学院教員	女	福島県	小学校・女性	仙台	私立裁縫館
鈴木浪吉	1903	鈴木裁縫学校設立者兼教員	男	佐波郡	裁縫業	東京	裁縫業
八木いと	1907	実用裁縫学校学校教員	女	前橋	女性	東京	和洋裁縫女学校/東京職業学校
樋口ナミ	1907	女子裁縫学校教員	女	前橋	裁縫所	東京	和洋裁縫女学校
小山とら	1907	明倫裁縫女学校教員	女	北甘楽郡	女性	東京	東京府教育会付属女子講習会/和洋裁縫女学校
北村さく	1907	西谷田裁縫女学校	女	邑楽郡	裁縫師	前橋	明治裁縫学校

どにおける裁縫教育は総じて個別指導で体系だった教授をせずに「見よう見まね」の弟子育成法がとられていたこととは対称的である²⁴⁾。またここからは、東京の裁縫女学校が上京した生徒を教育し地方へ新しい人材として送り出す機能を果たしていたことがわかる²⁵⁾。つまり東京の裁縫女学校と群馬県の裁縫女学校の間には、教員の供給を媒介として上下構造が存在していたといえよう。

そして遠く離れた場所で裁縫を学んだ教員は、単に裁縫や技芸の教授に止まることなく、さらに地元の裁縫教員の養成を担っていた。既述のように数校には不完全な形ながらも⑤「教員養成課程」が存在していた。だが当時の実態を見ていくと、課程が不十分である学校でも教員養成機能を十分に果たしていることがわかる。例えば明治裁縫学校本校では、1903(明治36)年段階で既に85人の生徒を県内外の裁縫教員として輩出していた。そして小学校や実業補習学校の教員履歴書には裁縫女学校が輩出した多くの裁縫の専科教員がみられるが、彼女らは免許状を必要としない小学校の「代用教員」や、実業補習学校の「訓導心得」「准訓導心得」という肩書で学校に勤務した。例えば碓氷郡秋間村の小林かつのは、1907(明治40)年に佐藤裁縫学校の本科を卒業した。彼女のその後の経歴は以下の通りである。

1908(明治41)年2月 群馬郡上郊尋常高等小学校
代用教員 月俸10円

1908(明治41)年11月 群馬郡相馬尋常高等小学校
尋常科代用教員 月俸10円

1911(明治44)年1月 群馬郡相馬村立相馬実業補習学校准訓導心得 手当金1円

1911(明治44)年11月 群馬郡田野村立女子実業補習学校訓導心得 15円

また、佐波郡芝根村の小柴そうは、1910(明治43)年3月に鈴木裁縫学校の本科を卒業した。その後の彼女の経歴も挙げよう。

1911(明治44)年12月 群馬郡宮城村立実業補習学校准訓導心得 俸11円

1912(大正元)年11月 群馬郡宮城村立実業補習学校訓導心得 俸12円

以上のように、裁縫女学校は整備された教則を持たなくても小学校や実業補習学校の教員を輩出していた。免許状を持たない裁縫女学校出身者が教職に就くことができた背景には、1902(明治35)年の群馬県女子師範学校設立でようやく本格化する免許状を

持つ女性教員の供給が、急速な女子就学の定着に追いつかなかったという事情が存在していたとみられる。表6によると、学級総数から見た尋常小学校における正教員の不足が当時1000人以上に上り、とりわけ女性教員の不足が目立っている。各学校はこの不足を准教員や代用教員で補っていた。とりわけ裁縫科については正教員が不足していたようで、『群馬県統計書』において多野郡では「已ムヲ得ス一時代用ヲ以テ之ヲ補フ殊ニ裁縫専科ニ於テ然リトス」(1904多野郡「小学校」)、碓氷郡では「代用教員ノ多数ハ専科(裁縫)正教員ノ代用ナリトス」(1905碓氷郡「小学校」)と報告している。また小学校に附設される実業補習学校でも女性教員は不足していた。1907(明治40)年度末で女子課程がある実業補習学校71校の教員の在職状況を調査すると、男性教員238人のうち専任の教員が18人(7.6パーセント)に過ぎないのに対して、女性教員百人のうち専任の教員が60人(60パーセント)に上る²⁶⁾。ここからは実業補習学校女子課程で、併置校の小学校教員の兼任では運営できない実態が明らかになる。

つまり、裁縫女学校は学校制度の外縁である各種学校ながら、学校制度の核心である公教育制度の維持を、教員を輩出するという形で実質的に担保するという役割を担っていたといえよう。そして何よりも裁縫女学校で学習することが、代用教員だとしても教師という職業に就く機会につながるという事実は、地域の人々に裁縫女学校で学習する意義を感じさせたに違いない。

このような時勢に適った意義を持つ裁縫女学校には地域から高い評価がされている。まず「裁縫私立学校一ツアリ九十余名ノ生徒ヲ有シ相当ノ成績ヲ収メツツアルモノノ如シ」(1903(明治36)年勢多郡)とか、「国府村ニ上毛裁縫学校アリ本校ハ本年ノ創立ニシテ現在生徒七十名ヲ有シ女教員三名ニテ教授シ

表6：1907(明治40)年度における小学校教員の身分

		学級数	男性	女性	合計	不足数
正教員	尋常	2258	1005	163	1168	1090
	高等	333	320	20	340	-7
准教員	尋常		386	130	516	
	高等		19	1	20	
代用教員	尋常		458	281	739	
	高等		14	36	50	

出所：『群馬県統計書』

成績頗ル良好ナリ而シテ生徒モ尚増加スルノ見込ナリ」(同年群馬郡)と『群馬県学事年報』で評価されている。また、明治裁縫学校が分校を設立した際には、「本校ニ賛成ヲ表セラレタル有志」として群馬県師範学校長、女子師範学校長、前橋中学校長、前橋市長、勢多郡長、国会議員、市会議員、新聞社長などの県内有力者105名もの賛同者を集めていた²⁷⁾。さらに同校へは1903(明治36)年度に、「前橋市会ヨリ本校設備費トシテ明治三十六年度補助金若干ヲ下附」されている。

○裁縫女学校の階層性

では、以上検討してきた教育課程や教育内容を享受する上で、学習者にはどれほどの負担が求められたのだろうか。表7を見ると授業料が学習水準や資格の価値と一致することがわかる。最高額は、卒業が裁縫科の専科正教員という公的な特典につながる佐藤裁縫学校の師範科と、上毛裁縫学校および鈴木裁縫学校の「上級課程」である研究科の1円50銭であった。対して1901(明治34)年における群馬県高等女学校の授業料は1円、1908(明治41)年における山田郡立高等女学校の授業料は1円50銭であった²⁸⁾。裁縫女学校の高級な課程では、普通学を教授する高等女学校と同等の授業料を取っていたのである。

そして寄宿舎に入る生徒にはさらに多くの負担が求められる。寮費は鈴木裁縫学校が「実費支弁トシ五円五拾銭ヲ超過スルコトナシ 但シ物価非常ニ高直ナルトキハ此限ニアラズ」と定め、明治裁縫学校本校は「寄宿者食費ハ一ヶ月五円ト定ムト雖モ物価ノ高低ニヨリ増減ス」と定めたように寄宿しながら裁縫女学校に学習する場合は、比較的安価な本科課程でも月に6円ほどの負担となり、こうした金額を負担可能な層はかなり限られていると推測できる。

表7：裁縫女学校の束修金平均と月授業料平均
(銭)

	標本数	束修金	月授業料	月授業料幅
①本科	13	43.6	48.6	20-75
②簡易	5	37.5	45.6	25-70
③速成	7	48.6	90.7	75-100
④上級	7	58.8	98.1	75-150
⑤教員 1 (佐藤裁縫)		50	150	—
⑥随意	4	1校30、 他0	1科28.8	25-30

裁縫女学校の生徒には都市から離れた農村部の生徒も表3のように少なくなかったのだが、地元を離れて都市部の裁縫女学校で学習することは、近所の実業補習学校に通学する負担と比較して非常に大きな負担であった。こうした学校の階層性が既述の嗜好品に偏る教育内容にも反映されていたことは当然だといえよう。

なお実業補習学校女子課程の授業料は、学校設置願から判明する23校の平均は裁縫女学校の約半額である22.8銭であり、中には授業料無償の実業補習学校も存在したという²⁹⁾。

おわりに

本稿では先行研究の示した構造を踏まえつつ、従来の見解とは必ずしも一致しない明治後期の裁縫女学校像を明らかにしてきたのではないかな。

まず高等女学校との比較では、教育内容の総合性や良妻賢母という教育目的においては従来指摘されていた通りの裁縫女学校の特徴が見られた。ただしこうした特質は現実の学校の隆盛にはそれほど影響を及ぼさなかったのではないかな。教育を受ける費用の面では両者に明確な差異が示されないにもかかわらず、とりわけ高等女学校が存在するような都市を中心に裁縫女学校が隆盛した。つまり総合的な教育を受けられる層の中にも裁縫女学校の特的な教育を受けることを望んだ者が少なくないという実態からは、明治後期においてはまだ初等後教育において普通学への需要や国家志向の教育目的がその地位を確立していなかったことが推測される。従来型の「婦徳」が実態では依然として根強かったともいえよう。また教育課程の多様さという特徴は裁縫女学校特有のものであり、とりわけ同時代の高等女学校に芸芸専修科が存在しなかった群馬県においては、裁縫女学校の多様な教育課程は魅力あるものとして映ったものと考えられる。

つづいて本稿では従来分析対象にならなかった補習教育や学校外の裁縫教育にも注目した。それらとの比較からは、学校規模、裁縫教育程度、教育を受ける費用(=階層性)、教員などの面における裁縫女学校を上位とする構造が明確になった³⁰⁾。また設置地域の点で、都市型の裁縫女学校と郡部型の実業補習学校という差異も明らかとなった。そして以上の差異が養蚕・機織の有無などの教育内容の差異に結

びついていたこともまた明らかとなった。

つまり地域内裁縫教育の比較検討からは大まかに言って、「裁縫女学校および高等女学校—実業補習学校、裁縫塾、仕立屋」という構造が存在していたのではないか。

そして、本稿では「東京の裁縫女学校—群馬県の裁縫女学校—市町村の実業補習学校および小学校」という裁縫教員の階層構造をも明らかにしたといえる。地域の裁縫教員を多数輩出したという事実を、先に触れた裁縫女学校の教員の多くが東京などの裁縫女学校から輩出された人材であったという事実と重ねて考えると、地域の裁縫女学校が近代的な裁縫技術を全国限なく伝播させる上での中継地点として機能していたことが浮かび上がってくる。ここからは教員の人的関係という新しい視点から、裁縫女学校の全国的かつ地域的な歴史的位置付けが明らかとなったといえよう。

さらに地域の裁縫女学校は免許の有無に関わらず町村の学校で裁縫教員になれる技術を生徒に与え、かつ不足する裁縫教員を公立学校に輩出することで、公教育の質を実質的に維持し、非常に限定された意味であるが女性の社会進出を促進するという地域内において重要な機能を果たしたことも同時に指摘された。

以上本稿の検討からは裁縫女学校の地域内における独自の位置と機能が明らかになったといえよう。

註

- 1) 明治後期の女子就学率上昇については、従来指摘される全国的な経済構造変化や言説上の国家的意識高揚だけでは一般に説明しきれない。地域ごとの要因を詳細に検討することが必要であろう(土方苑子『近代日本の学校と地域社会—村の子どもはどう生きたか』(東京大学出版会、1994))。
- 2) 群馬県では1900(明治33)年「女子教育ノ振興ニ就キテハ既ニ一ノ高等女学校ヲ設置セリト雖モ将来猶一ニ校ノ増設ヲ要セリト信ス」とさらなる女子教育拡大を述べ、1902(明治35)年には「高等小学校ニ於ケル女子ノ就学ヲ奨励スルコト」という事項をはじめて取り上げた。同様に、翌1903(明治36)年の各郡の「将来学事施設上須要ノ件」でも、「高等小学校ニ於テ女兒ノ就学ヲ奨励ス」(利根郡)、「高等科ニ女兒ノ入学ヲ奨励スルコト」(佐波郡)が挙げられた。これらの記述からは女子児童の増加に伴い、上級学校の必要性が認識され始めたことが窺える。
- 3) 『日本近代教育百年史四 学校教育(2)』(国立教育研究所、1974) 1130頁。その視点を踏襲し地方の女学校を分析したものに中井良弘「明治後期、女子中等教育に関する一考察—名古屋市における市立各種女学校の場合」(『椋山女学園大学研究紀要』第13号第2部、1981)、二見剛史『女子教育の源流』(鹿児島女子大学、1991)。
- 4) 常見育夫『明治以降裁縫教育史大要・裁縫関係法令抄』(渡辺学園、1935)、同『家庭科教育史』(光生館、1959)が草分け的な研究である。
- 5) 『明治三二年滋賀県統計書』(滋賀県庁、1901)
- 6) 隣県である栃木県国本村(現宇都宮市)に1920(大正10)年に生まれた池田サワは、高等小学校卒業後東京亀戸の作業着工場へ女工として住み込みで就職するまでの数年間、地元および親戚のいた茨城県日立で裁縫師匠について、裁縫を学習している。また1914(大正4)年生まれ姉は、隣町である宇都宮市清住町の松木屋呉服店にて裁縫の学習をした。池田によると、この呉服屋は両親と息子夫婦が経営していたが、経営の中心を両親と息子が担っていたので、時間のある息子の妻が女子を集めて裁縫を教授していたという。ただ、池田によれば呉服屋での裁縫学習は「あまり多くなかった」とのことである。(2005.5.14聞き取り)
- 7) 公立裁縫女学校を対象とした先行研究では公教育としての役割が注目され、明治前期の女紅場から小学校補習科へ、続いて「小学校令」による「小学校ニ類スル各種学校」としての手芸女学校や実業補習学校へ、そして実科高等女学校へと至る系譜が明らかになっている。(坂本泉水・坂本智恵子『近代女子教育の成立と女紅場』(あゆみ出版、1980)、森岡伸枝「明治期の女紅教育の変容」(『日本の教育史学』第四四集、2001)、土方苑子前掲書第5章及び「府県学事年報」に見る「小学校ニ類スル各種学校」(『教育学年報』10、世織書房、2004)、水野真知子「女子中等教育史における実科高等女学校—その実態と存廃をめぐる一考察」及び「女子中等教育史における実科高等女学校—その実態と存廃をめぐる一考察—2—」(『立教大学教育学科研究年報』33巻34巻、1989、1990)。
- 8) 表1は各道府県の『統計書』『府県治一斑』『学事年報』の諸学校表より作成。1897(明治30)年と1907(明治40)年を基本に、史料が入手できなかった場合は周辺の年度から各府県の女子各種学校の校数を導き出した。1897(明治30)年調査では、北海道は1896(明治29)年から、大阪・兵庫・奈良は1898(明治31)年から、埼玉は

- 1899 (明治32) 年の史料を使用 (1898年と1899年創立学校は除外)。1907 (明治40) 年調査では、長崎は1903 (明治36) 年、山梨は1904 (明治37) 年、和歌山は1905 (明治38) 年、北海道・福島は1906 (明治39) 年、青森・岩手・埼玉・東京・岐阜・三重は1908 (明治41) 年、新潟・奈良・山口は1909 (明治42) 年の史料を使用 (1908年と1909年創立学校は除外)。
- 9)『日本近代教育百年史(四) 学校教育(二)』、1159～1172 頁。
- 10)「実業補習学校ノ設置ニ関スル方法調査報告書」(『上野教育会雑誌』156号、1900)。長野、京都、兵庫、岡山などでは郡部に「小学校ニ類スル各種学校」として公立裁縫女学校が小学校に附設された。群馬県では、実業補習学校の女子課程が公立の「小学校ニ類スル各種学校」と同様な地位の学校として設立されたと考えられる。
- 11)『明治四十年群馬県統計書 学事之部』(群馬県内務部、1909)。
- 12)「各郡の講習会」(『上野教育会雑誌』190号、1903)
- 13)「明治三十七年起補習学校職員履歴」(『群馬県行政文書』八二A五一二の二)。以下、小学校と実業補習学校の裁縫教員履歴書は、全て同文書出典。
- 14)常見前掲書88～95頁。
- 15)裁縫女学校に関する史料引用は断りがない限り、太田裁縫学校は「明治二六年私立学校小学校」(明二二七二 二／二)、高崎婦学院は「明治二七年官立学校私立学校」(明二二九〇)、大友裁縫学校は「明治二八年私立各種学校」(明二七四八)、前橋裁縫学校は「明治三〇年私立小学校」(明二三五三)、鈴木裁縫学校・上毛裁縫学校・明治裁縫学校は「明治三六年各種学校」(明二四一七)、実用裁縫学校・女子裁縫学校・明倫裁縫学校・西谷田裁縫女学校は「明治四〇年各種学校」(明二四六三)(以上群馬県公文書館蔵『群馬県行政文書』、佐藤裁縫学校は『群馬県教育史 明治編二』(一九七三) 646～655頁による。
- 16)「教育施設・訓育」(『群馬県行政文書』明二四九七)
- 17)「裁縫ヲ教授ス」(大友裁縫学校)、「本校ハ女子ニ裁縫ヲ教授スルヲ目的トス。本校ハ和服ノ裁縫ヲ教授スルヲ以テ目的トス」(太田裁縫学校)。
- 18)太田裁縫学校設立者太田ウメは、閉校後に地元の茨城県で茨城女子高等技芸学校という群馬県時代はなかった教員養成課程などの複数の課程を持つ裁縫学校を立ち上げている(『明治三十七年茨城県統計書第二編』茨城県、1907)。
- 19)小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、1991)
- 20)『群馬県教育史 明治編二』645頁。
- 21)「実業補習学校表」(『上野教育会雑誌』196号、1904)。
- 22)羽田九八「裁縫教授における所感」(『上野教育』294号、1912)。
- 23)鈴木裁縫学校でも絹を使用した衣服製作がなされ、縮や縮緬といった高価な素材を使用していたことが確認される。
- 24)常見前掲書88～95頁。
- 25)渡辺辰五郎の東京裁縫女学校卒業生の裁縫女学校設立については二見前掲書を参照。
- 26)「公私立諸学校」(『明治四十年群馬県統計書 学事之部』群馬県内務部、1909)
- 27)「明治三六年各種学校」(『群馬県行政文書』明二四一七)。
- 28)『群馬県教育史 明治編二』398頁～424頁。
- 29)「教育施設・訓育」(『群馬県行政文書』明二四九七)などに所収の実業補習学校設立願から算出。
- 30)大分県の裁縫女学校の教員養成については、福留美奈子「裁縫女学校における教員養成」(野村新・佐藤尚子・神崎英紀編『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究—戦前日本における地方実践例の解明』(溪水社、2001))がその存在を紹介している。しかしその全国的な教員の流れや、地域内の教員構造と結びつけての実証的な検討に不十分な点が多い。